原 著

過失に対する赦しの評価に怒り感情・信憑性・重大性の評価が及ぼす影響¹

東北大学大学院文学研究科	菊 地 史 倫
東北大学大学院文学研究科	佐 藤 拓
東北大学大学院文学研究科	阿 部 恒 之
東北大学大学院文学研究科	仁 平 義 明

Effects of anger emotion, credibility, and the severity on forgiveness

Fumitoshi Kikuchi, Taku Sato, Tsuneyuki Abe & Yoshiaki Nihei
*Division of Human Sciences (Psychology), Graduate School of Arts and Letters,
Tohoku University*

This study examined whether excuses, which vary with the possibility of occurrence, influence ratings of forgiveness, anger, credibility, and the severity of the message. One hundred and eighty-three (183) university students were asked to read three scenarios wherein an acquaintance provided reasons for arriving late for an appointment. In these scenarios, the participants were the protagonist who were waiting for their acquaintance. The participants then rated the degree of forgiveness, anger, credibility, and the severity of the message for each reason. Results suggested that the possibility of occurrence had the opposite effect on the raters' judgments regarding credibility and forgiveness, i.e., an excuse with common content resulted in high ratings of credibility, but low ratings of forgiveness, and vice versa. Furthermore, results suggest that the ratings of forgiveness for a latecomer originate from the raters' regulation of their anger.

Key Word: deception, possibility of occurrence, anger emotion

ウソの心理学的な定義は定まっておらず、扱われる領域や分野で異なっている (Massip, Garrido, & Herrero, 2004)。しかしながら、多くの先行研究の定義に共通している構成要素が2つ存在する。

第一の要素は「虚偽性」である。これはウソをつく人がウソをつかれる人に対して事実と異なる内容を伝えることを示す。

第二の要素は「意図性」である。ウソをつく

場合には、意図的に事実と異なる内容を相手に信じさせる必要がある。この意図性が存在しない“結果的なウソ”は単なる誤りとなり、心理学的なウソとしては扱わない (Massip et al, 2004; Miller & Stiff, 1993; 村井, 2000a)。

一般的にウソをつくことは道徳や社会規範に違反することだと考えられている (Bok, 1978 吉田暁訳 1982)。しかしそれにもかかわらず、ウソは日常的に利用されている (e.g.

1 本研究は、第一著者が東北大学大学院文学研究科に提出した2006年度修士論文の一部を加筆・修正したものである。また、本研究の一部は日本感情心理学会第15回大会と日本認知心理学会第5回大会において発表された。

DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein, 1996; 村井, 2000b)。この矛盾はウソに社会的機能が含まれていることを示すものであり、ウソは何らかの目的達成を志向した社会的潤滑油 (social lubricant) の一つであるという指摘もある (Saxe, 1991)。このようにウソをつくことは道德の違反だけを意味するのではなく、対人コミュニケーションを円滑にする方略の一つとして捉えることができる (Miller & Stiff, 1993)。したがって心理学的なウソを検討する際に、「何のために」ウソをつくのかといった動機について考慮する必要がある。

日常的にウソをつくときの動機は、程度に違いはあるが利己的な動機と利他的な動機に分類できる (e.g. Camden, Motley, & Wilson, 1984; Lindsfold & Walters, 1983)。利己的な動機に基づくウソは、自らの新たな利益を得たいか、何らかの不利益を回避・挽回したいと考えたときにつかれるウソである (Bok, 1978 吉田暁訳 1982)。新たな利益を得るためにつかれるウソは搾取的なウソであり、詐欺などで使用される。また不利益を回避・挽回するためのウソは対処的なウソであり、日常的に使用される。利他的な動機に基づくウソは、ウソをつかれる人もしくは第三者のためには真実を伝えない方が良くと判断されたときにつかれるウソである。これについても同様に、新たな利益獲得と不利益の回避・挽回のためにつかれるウソがある。

日常的なウソが利己的な動機と利他的な動機のどちらに基づくかを検討した調査では、女性が女性にウソをつく場合を例外として、利他的な動機よりも利己的な動機に基づくウソが多くつかれていた (DePaulo, 2004; DePaulo et al., 1996)。したがって、利他的な動機よりも利己的な動機に基づくウソの方が一般的なウソだと考えられる。

上記で整理したウソの構成要素とウソをつくときの動機の分類を踏まえて、本研究では「自分あるいは他人の不利益の回避・挽回のために、

または新たな利益を獲得するために、相手に誤った理解・信念を生じさせるべく意図的に伝えられる虚偽」をウソと定義する。本研究は、このウソの定義に内包される「自分の不利益を回避・挽回するため」の利己的な動機に基づくウソを研究対象とする。ただし本研究の手続きではウソであることを参加者に直接明示せず、過失の理由を説明する発言内容を用い、その「本当らしさ (信憑性)」を評価させる。ウソを対象とした研究でウソであることを明示しない手続きは、「ウソらしさ (欺瞞性)」を評価させる村井 (1998) の研究など多くのウソ研究で共通している。以下、「ウソ」という用語はウソが直接明示されている場合にのみ使用する。また発言内容による不利益の回避・挽回の程度について検討するため、過失に対して与える赦しを評価させる。

本研究で対象とした不利益を回避・挽回に関連した状況では、不利益をめぐる対人的な葛藤が生じる可能性が高い。このような葛藤場面では、嫌悪・怒り・悲しみといったネガティブな感情を体験しやすい (齋藤, 1985)。そして被害者の怒り感情が高まったときには、怒り感情が高まらないときよりも相手を赦さなくなることが指摘されてきた (e.g. Barber, Maltby, & Macaskill, 2005; Enlight & Coyle, 1998)。したがって過失の弁明においては、相手の怒り感情を抑制することができるかどうかが重要になってくる。

また信憑性の評価が低い発言は、発言を聞いた人の怒り・憤慨・失望などのネガティブな感情を高める傾向が報告されている (Buller & Burgoon, 1998; McCornack & Levine, 1990)。そして出来事の起こりやすさ (以下、生起確率) と信憑性の評価には負の関係があり、生起確率の高い出来事を理由とした弁明は相手から信じられやすく、逆に生起確率の低い出来事を用いた弁明は信じられにくい (菊地・佐藤・阿部・仁平, 2007; 村井, 1998)。したがって過失理由を説明する発言内容の生起確率・信憑性・怒り感情・赦しの評価についての知見をま

とめると（A）生起確率の高い出来事を用いた発言内容は出来事の信憑性が高く評価され、怒り感情を抑制して、過失に対する赦しを得やすくなると考えられる。

その一方で、生起確率が高く評価される出来事は重大でない出来事として評価され（Lichtenstein, Slovic, Fischhoff, Layman, & Coombs, 1978）、過失理由が重大でないと評価された場合は過失に対する赦しの評価を得にくいことが示されている（Shapiro, 1991）。したがって過失の理由を説明する発言内容の生起確率・重大性・赦しの評価についての知見をまとめると、（B）生起確率の高い出来事を用いた発言内容は出来事の重大性が低く評価され、過失に対する赦しの評価を得にくいという推測が成り立つ。

以上、過失理由の生起確率と赦しの評価の関係については（A）と（B）の異なる推測が成り立つが、（A）においては重大性の評価、（B）においては信憑性と怒り感情の評価の観点が欠落している。

そこで本研究では、過失理由を説明する発言内容の生起確率・怒り感情・信憑性・重大性・赦しの評価の総合的な関連性に着目した。具体的には、参加者が相手の遅刻で待たされる立場のシナリオを用い、遅刻理由を説明する発言内容の生起確率と、待たされたことによって生じる負担を操作し、それぞれの設定状況における怒り感情・信憑性・重大性・赦しの評価の関連性を検討する。このとき、遅刻理由は参加者にウソとして呈示されるものではないが、このような弁明場面はウソの可能性が懸念される状況である。ウソ研究の文脈で研究されてきた過失理由の生起確率・信憑性・重大性・赦しの評価とともに怒り感情の関連を検討することで、こ

のような状況における感情の機能的役割を探索する。

方 法

調査対象者

18歳から31歳までの大学生、大学院生183名（平均年齢20.47歳、 $SD=1.80$ 歳）。そのうち男性は93名（平均年齢20.52歳、 $SD=1.82$ 歳）、女性は90名（平均年齢21.42歳、 $SD=1.79$ 歳）。

調査時期と調査方法

2006年7月から8月の間に大学の講義時間内における集合法（173名）、および個別配布・個別回収形式（10名）により質問紙調査を行った。

調査内容

要因計画 「発言内容の生起確率」（3水準：参加者内）×「状況の身体負担」（3水準：参加者間）の2要因混合計画。従属変数は、赦し・信憑性・重大性・怒り感情の評価に関する4項目。

実施方法 参加者は質問紙の表紙に書かれた注意事項を確認の上、性別、年齢、学部または研究科を記入した。次に参加者は、待ち合わせの相手が遅刻してきた状況と、その生起確率が操作された会話についてのシナリオを読んだ。シナリオを読んだ後、6つの質問項目について評定を行った。同様の手続きで残りの2つの会話について回答した。生起確率が操作された会話の提示順序はランダムだった。

状況 予備調査により大学生がウソを想起しやすい状況を選定した²。その結果を参考にし、本研究では打ち合わせの相手が約束の時間に遅れ、その理由を説明するという状況を以下のよう

2 質問紙調査による予備調査からシナリオの状況を以下のように選定した。本研究とは別の152人の参加者に実際に付いたことのある利己的なウソを想起させ、その内容について自由記述させた。その内容を DePaulo, et al. (1996) の日常的なウソの5つのカテゴリーに基づいてコーディングした結果、参加者が想起した利己的なウソの73%が「理由・説明」（相手から理由や説明を求められたときに、その内容についてウソをつくこと）であった。本研究で対象としたウソは「不利益を回避するため」の利己的なウソであり、ウソをつく人が何か失敗した状況で言い訳をする場面が適切と考えられる。予備調査で得られた内容を加味し調査者で状況について協議した結果、大学生に馴染み深いと考えられる遅刻場面を選定した。

Aさんと打ち合わせをするために、待ち合わせをしていました。真夏のとても蒸し暑い日でした。あなたは約束の時間通りに待ち合わせ場所に来て、炎天下のなか外で立ってAさんを待っていました。しかし、Aさんは約束の時間よりも遅れてやってきました。次のやりとりはあなたとAさんの会話です。(斜字体、波線は原文のまま)であり、斜字体の「状況の身体負担」が参加者間要因として3水準で操作された。身体負担低条件は「近くの喫茶店で座って」、身体負担中条件は「炎天下のなか日陰で座って」、身体負担高条件は「炎天下のなか外で立って」であり、これらの条件は予備調査により選定された³。これは他者から過酷なことをされたほど相手を赦さなくなるという知見 (Fincham, Jackson, & Beach, 2005) から、従属変数の1つである赦しの評価に影響を与える可能性を考慮しての操作であった。

会話 状況に続いて打ち合わせの相手が何故遅刻してきたのかを答える会話が続いた。具体的な会話は「あなた：“どうして遅れたの?”、Aさん：“途中で道路工事をしており渋滞していたのでバスが遅れました。”(原文に波線なし)」であり波線部の遅刻理由を説明する「発言内容の生起確率」が参加者内要因として3水準で操作された。生起確率低条件は「乗っていたバスが前の車に衝突してしまい」、生起確率中条件は「踏切が故障していて渋滞したのでバスが」、生起確率高条件は「途中で道路工事をしており渋滞したのでバスが」であり、これらの条件は予備調査により選定された⁴。

質問項目 要因操作の成否を確認するために、発言内容の生起確率の評価 (0：めったにない

ことである～10：よくあることである)と状況の身体負担の評価 (0：まったく身体に負担を感じない～10：強く身体に負担を感じる)について11段階の評定を求めた。従属変数については、遅刻に対する赦しの評価 (0：まったくゆるせない～10：全面的にゆるせる)、過失理由を説明する発言内容の信憑性の評価 (0：完全にウソだと思う～10：絶対に本当・真実だと思う)、過失理由を説明する発言内容の重大性の評価 (0：まったく深刻なことではない～10：かなり深刻なことである)、過失理由を説明する発言内容を聞いたときの怒り感情の評価 (0：まったく腹が立たない～10：かなり腹が立つ)を求めた。

結果

参加者の回答の項目に欠損値がある場合はその項目全てを欠損値として扱ったため、各項目間の人数は異なる。

条件操作の確認

発言内容の生起確率の評価について、「発言内容の生起確率」(3水準：参加者内)×「状況の身体負担」(3水準：参加者間)要因の分散分析を行った結果、「発言内容の生起確率」の主効果のみが有意であった ($F(2, 358) = 250.25, p < .001$)。Ryan法による多重比較の結果⁵、参加者は生起確率高条件 ($M = 6.37, SD = 2.42$)、生起確率中条件 ($M = 3.40, SD = 2.49$)、生起確率低条件 ($M = 1.48, SD = 1.92$)の順に出来事の生起確率を高く評価した ($MSe(358) = 4.42, \alpha = .05$)。以上の結果から「発言内容の生起確率」の操作は成功していた。

3 状況の身体負担は、調査者らが協議し5つの状況を設定した。次に本研究とは別の10人の参加者に身体負担について11件法 (0：まったく身体に負担を感じない～10：強く身体に負担を感じる)で評定させた。その結果得られた平均評定値を低い順に並べ、1番目の状況を身体負担低条件、3番目の状況を身体負担中条件、5番目の状況を身体負担高条件として選定した。

4 本研究とは別の8人の参加者にバスが遅れる理由を3つずつ質問紙に自由記述させた。調査者らが自由記述の内容分類について協議し、最終的に9つの理由を刺激候補とした。この9つの遅刻理由の生起確率を、先ほどの調査と本研究とは別の10人の参加者に11件法 (0：めったにないことである～10：よくあることである)で評定させた。その結果得られた平均評定値を低い順番に並べ、2番目の理由を生起確率低条件、5番目の理由を生起確率中条件、8番目の理由を生起確率高条件として選定した。

5 以下、多重比較は全てRyan法を用いた。

状況の身体負担の評価について、「状況の身体負担」（3水準：参加者間）要因の分散分析を行ったところ、「状況の身体負担」の主効果が有意であった（ $F(2, 175) = 49.17, p < .001$ ）。多重比較の結果、参加者は状況の身体負担高条件（ $M = 7.60, SD = 2.04$ ）、身体負担中条件（ $M = 6.57, SD = 2.09$ ）、身体負担低条件（ $M = 3.69, SD = 2.57$ ）の順に身体への負担を強く評価した（ $MSe(175) = 5.06, \alpha = .05$ ）。以上の結果から「状況の身体負担」の操作は成功していた。

「発言内容の生起確率」と「状況の身体負担」が赦しの評価に及ぼす影響

遅刻に対する赦しの評価について、「発言内容の生起確率」（3水準：参加者内）×「状況の身体負担」（3水準：参加者間）要因の分散分析を行ったところ、「発言内容の生起確率」に有意な主効果が見られた（ $F(2, 360) = 4.92, p < .01$ ）。多重比較の結果、生起確率中・高条件の発言内容は、生起確率低条件の発言内容よ

りも過失に対する赦しの評価を得られなかった（ $MSe(360) = 3.38, \alpha = .05$ ）（Table 1）。

また「状況の身体負担」に有意な主効果が見られた（ $F(2, 180) = 3.10, p < .05$ ）。多重比較の結果、状況の身体負担中・高条件のときは身体負担低条件のときよりも、参加者は遅刻者を赦さない傾向にあった（ $MSe(177) = 11.08, \alpha = .10$ ）（Table 2）。

「発言内容の生起確率」と「状況の身体負担」が信憑性の評価に及ぼす影響

過失理由を説明する発言内容の信憑性の評価について「発言内容の生起確率」（3水準：参加者内）×「状況の身体負担」（3水準：参加者間）要因の分散分析を行った結果、「発言内容の生起確率」の主効果のみが有意であった（ $F(2, 360) = 17.69, p < .001$ ）。多重比較の結果、生起確率高条件の発言内容は、生起確率低・中条件の発言内容よりも参加者から信じられていた（ $MSe(360) = 4.72, \alpha = .05$ ）（Table 1）。

Table 1 「発言内容の生起確率」別の各従属変数の平均値と標準偏差

	「発言内容の生起確率」		
	低	中	高
従属変数	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$
赦し	6.64(2.67) ^a	6.07(2.33) ^b	6.20(2.38) ^b
信憑性	4.66(2.98) ^a	5.01(2.41) ^a	5.96(2.32) ^b
重大性	7.46(2.27) ^a	4.82(2.60) ^b	2.93(2.04) ^c
怒り感情	4.00(2.75) ^a	4.57(2.30) ^b	4.68(2.40) ^b

注：従属変数は全て11件法（0～10）。同じ行で異なるアルファベット記号がついている値は、Ryan法の比較で有意差 $p < .05$ の差を示す。

Table 2 「状況の身体負担」別の各従属変数の平均値と標準偏差

	「状況の身体負担」		
	低	中	高
従属変数	$M(SD)$	$M(SD)$	$M(SD)$
赦し	6.80(2.42) ^{a†}	6.05(2.49) ^b	6.05(2.44) ^b
信憑性	4.95(2.98)	4.18(2.91)	4.82(3.04)
重大性	6.64(2.67)	6.06(2.33)	6.20(2.38)
怒り感情	3.81(2.45) ^a	4.51(2.54) ^{b†}	4.91(2.41) ^b

注：従属変数は全て11件法（0～10）。同じ行で異なるアルファベット記号がついている値は、Ryan法の比較で有意差 $p < .05$ の差を示す（ただし†つきは有意差 $p < .10$ ）。

「発言内容の生起確率」と「状況の身体負担」が重大性の評価に及ぼす影響

過失理由を説明する発言内容の重大性の評価について、「発言内容の生起確率」(3水準：参加者内) × 「状況の身体負担」(3水準：参加者間) 要因の分散分析を行ったところ、「発言内容の生起確率」の主効果のみが有意であった ($F(2, 358) = 243.68, p < .001$)。多重比較の結果、生起確率高条件の発言内容は、生起確率低・中条件の発言内容よりも重大性が低く評価された ($MSe(358) = 3.86, \alpha = .05$)。また生起確率中条件の発言内容は、生起確率低条件の発言内容よりも重大性が低く評価された ($MSe(358) = 3.86, \alpha = .05$) (Table 1)。

「発言内容の生起確率」と「状況の身体負担」が怒り感情の評価に及ぼす影響

過失理由を説明する発言内容を聞いたときの怒り感情の評価について、「発言内容の生起確率」(3水準：参加者内) × 「状況の身体負担」(3水準：参加者間) 要因の分散分析を行ったところ、「発言内容の生起確率」の主効果が有意であった ($F(2, 358) = 8.15, p < .001$)。多重比較の結果、生起確率中・高条件の発言内容は生起確率低条件の発言内容よりも、怒り感情が高く評価された ($MSe(358) = 2.99, \alpha = .05$) (Table 1)。

また「状況の身体負担」の主効果が有意であった ($F(2, 179) = 4.75, p < .01$)。多重比較の結果、状況の身体負担高条件のときは身体負担低条件のときよりも参加者の怒り感情の評価が高く ($MSe(179) = 12.08, \alpha = .05$)、身

体負担中条件のときは身体負担低条件のときよりも怒り感情の評価が高い傾向があった ($MSe(176) = 12.08, \alpha = .10$) (Table 2)。

生起確率が異なる発言内容の赦しの評価と信憑性・重大性・怒り感情の関連性

生起確率が異なる発言内容の赦しの評価と信憑性・重大性・怒り感情の関連性を検討するために、各評価の評定値の相関を Table 3 に示した。発言内容の赦しの評価と信憑性・重大性・怒り感情の評価には全て有意な相関があり、赦しと怒り感情の評価に強い負の相関 ($r = -.67, p < .01$) が見られた。また赦しと信憑性の評価に中程度の正の相関 ($r = .48, p < .01$) が見られた。さらに赦しと重大性の評価に弱い正の相関 ($r = .11, p < .05$) が見られた。

考 察

分散分析の結果から、参加者が生起確率の高い発言内容を聞いたとき、過失に対する赦しを低く、信憑性を高く、重大性を低く、怒り感情を高く評価することが示された (Table 1)。状況の身体負担の操作については、身体負担が高い状況において、怒り感情を高く評価すること、ならびに過失に対する赦しを低く評価する傾向 ($p < .10$) が示された (Table 2)。

生起確率の高い発言内容の重大性が低く評価されることは Lichtenstein et al. (1978) の知見と一致する。生起確率が高く評価される出来事は、日常的に経験されることが多く、その経験によって危険に曝される可能性も少ないことから重大性の評価が低くなったと考えられる。

Table 3 赦しの評価と信憑性・重大性・怒り感情の評価の関連性

	1	2	3	4
1. 赦し	—	.48**	.11*	-.67**
2. 信憑性	(543)	—	-.07	-.48**
3. 重大性	(543)	(543)	—	-.14*
4. 怒り感情	(543)	(543)	(543)	—

注：右上の数値は相関、左下の数値は有効標本数を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$

発言内容の生起確率と怒り感情の評価の結果からは、生起確率の低い発言内容が参加者の怒り感情の評価の高まりを抑制した可能性が指摘できる。ただし本研究においては生起確率の異なる過失を説明する発言内容のシナリオ間での比較であり、過失を説明する発言内容がない場合との比較検討を加える必要がある。

過失理由を説明する発言内容の生起確率が低いときに高い赦しの評価が得られたことは、上記の重大性の評価の結果とともに、Bの推測（生起確率の高い出来事を用いた発言内容は、重大性が低く評価され、過失に対する赦しの評価を得にくい）を支持する。また、生起確率が低い発言内容で怒り感情の評価が低くなっていた。生起確率の低い発言内容は、遅刻者に重大なことが起こったのだから仕方がないと遅刻理由を納得させ、怒り感情の評価を低下させた可能性がある。そして怒り感情が高まらないことが、最終的な赦しの評価を導いたという可能性が考えられる。

しかしAの推測（生起確率の高い出来事を用いた発言内容は、信憑性が高く評価され、怒り感情を抑制して、過失に対する赦しの評価を得やすくなる）の一部である、生起確率の高い発言内容は信憑性の評価が高くなることも確認された。Grice (1975) は、会話において守るべき原則として質・量・関係・様式という4つの公準を提案している。そして会話の参加者がこの原則に違反し、発言内容において各公準を満たさなかったときに、その発言にウソを認知するという情報操作理論がある (McCornack, 1992)。村井 (1998) は、質の公準にはいくつかの下位公準があり、その一つとして出来事の起こりやすさの評価を指摘している。

また発言内容の生起確率を高く評価することが高い信憑性の評価を導いた他の理由として認知的感情 (cognitive feelings) の一つである熟知感 (familiarity) が挙げられる。認知的感情は情報処理過程で生じる経験であり、情報を処理するときの流暢性 (fluency) に関係するものとされる (Bless & Forgas, 2000)。つ

まり生起確率が高い発言内容だと評価することは熟知感の高まりを示し、その熟知感が信憑性に誤って帰属されることで信憑性の評価が高まる可能性が考えられる。実際に繰り返し提示され、熟知感の高まった文章はもっともらしく感じられることが報告されている (Arkes, Boehm, & Xu, 1991)。

さらに、評価項目間の相関 (Table 3) からは、上述の分散分析の結果とは異なる関連性がうかがえる。発言内容の重大性の評価は怒り感情 ($r = -.14$) や赦し ($r = .11$) との間に、有意とはいえ低い相関しか認められなかった。しかしながら発言内容の信憑性と怒り感情 ($r = -.48$)・赦し ($r = .48$) の評価の相関は高く、信憑性が高く評価されることが低い怒り感情と高い赦しの評価に関連していた。したがって遅刻者の発言内容を信じた方が怒り感情の評価を高めないことになり、Aの推測が支持されることになる。発言内容の生起確率を要因とした分散分析の結果からはBが支持され、評価項目間の相関からはAが支持されるという矛盾は、重大性や信憑性以外のより重要な要因が存在することに起因する可能性がある。この要因としては、発言内容の予測可能性や対処可能性の評価などが考えられる。遅刻者が遅刻理由に対する予測 (e.g. バスはよく遅れる) や対処 (e.g. 予定の時間より早めにつくバスに乗る) を怠ったという評価が怒り感情や赦しの評価に影響を及ぼしていた可能性があり、これらの要因の探索は新たな課題である。

また怒り感情の評価が赦しの評価と高い負の相関を示していたことが注目される ($r = -.67$)。生起確率の低い過失理由が、低い怒り感情・高い赦しの評価と関連していた分散分析の結果とあわせ考えると、生起確率の低い過失理由が赦しの評価に結びつくのは、怒り感情の評価を低下させるような感情の抑制に由来している可能性が示唆される。

過失理由を説明する発言内容の生起確率・信憑性・重大性・怒り感情・赦しの総合的検討から、赦しの評価にもっとも強く影響するのが怒

り感情の評価であることが示された。本研究は、遅刻者の過失で参加者が被害を受けたとき、その過失理由を説明する発言内容によって赦しの評価などがどのような影響を受けるかについて検討したものであり、直接的にはウソを扱っていない。しかしながら、このような状況でなされる弁明にはウソが含まれることが懸念されると思われる。これまでのウソ研究では信憑性の評価が重視されてきたが、その評価よりも感情の評価のほうが、過失に対する赦しの評価に明瞭な影響を持つことが示唆された。そしてこの結果は、ウソには他者の感情を制御するという機能的役割が含まれる可能性を示唆するものである。

引用文献

- Arkes, H. R., Boehm, L. E., & Xu, G. (1991). Determinants of judged validity. *Journal of Experimental Social Psychology*, **27**, 576-605.
- Barber, L., Maltby, J., & Macaskill, A. (2005). Angry memories and thoughts of revenge: The relationship between forgiveness and anger rumination. *Personality and Individual Differences*, **39**, 253-262.
- Bless, H., & Forgas, J. P. (2000). The message within: Toward a social psychology of subjective experiences. In H. Bless, & J. P. Forgas (Eds.), *The messages within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia: Psychology Press, pp. 372-392.
- Bok, S. (1978). *Lying: Moral choice in public and private life*. New York: Pantheon Books.
- (ボク, S. 吉田暁 (訳) (1982). 嘘の人間学 TBSブリタニカ)
- Buller, D. B., & Burgoon, J. K. (1998). Emotional expression in deception process. In P. A. Anderson & L. K. Guerrero. (Eds.), *Handbook of communication and emotion: Research, theory, applications, and contexts*. San Diego; Tokyo: Academic Press, pp. 381-402.
- Camden, C., Motley, M. T., & Wilson, A. (1984). White lies in interpersonal communication: A taxonomy and preliminary investigation of social motivations. *The Western Journal of Speech Communication*, **48**, 309-325.
- DePaulo, B. M. (2004). The many faces of lies. In A. G. Miller (Ed.), *The social psychology of good and evil*. New York, NY, US: Guilford Press, pp. 303-326.
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 979-995.
- Enlight, R. D., & Coyle, C. (1998). Researching the process model of forgiveness within psychological interventions. In E. L. Worthington (Ed.), *Dimensions of Forgiveness: Psychological Research and theological Perspectives*. Philadelphia, PA: Templeton Foundation Press, pp. 79-104.
- Fincham, F. D., Jackson, H., & Beach, S. R. H. (2005). Transgression severity and forgiveness: Different moderators for objective and subjective severity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 860-875.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics: Speech act*. New York: Seminar Press, Vol. 3, pp. 41-58.
- 菊地史倫・佐藤拓・阿部恒之・仁平義明 (2007). 生起確率操作によるウソの検討：ウソをつかれるときの信じることと赦すこと 日本認知心理学会第5回大会発表論文集, 103.
- Lichtenstein, S., Slovic, P., Fischhoff, B., Layman, M., & Coombs, B. (1978). Judged frequency of lethal events. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning*

- and Memory*, **4**, 551-578.
- Lindsfold, S., & Walters, P. S. (1983). Categories for acceptability of lies. *Journal of Social Psychology*, **120**, 129-136.
- Massip, J., Garrido, E., & Herrero, C. (2004). Defining deception. *anales de psicologia*, **20**, 147-171.
- McCornack, S. A. (1992). Information manipulation theory. *Communication Monographs*, **63**, 1-16.
- McCornack, S. A. & Levine, T. (1990). When lies are uncovered: Emotional and relational outcomes of discovered deception. *Communication Monographs*, **57**, 119-138.
- Miller, G. R., & Stiff, J. B. (1993). *Deceptive communication*. Newbury Park: Sage.
- 村井潤一郎 (1998). 情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性分析 心理学研究 **69**, 401-407.
- 村井潤一郎 (2000a). ウソという言葉一言語的側面へのアプローチ 平伸二・中山誠・桐生正幸・足立浩平 (編) ウソ発見—犯人と記憶のかけらを探して— 北大路書房 pp. 13-22.
- 村井潤一郎 (2000b). 青年の日常生活における欺瞞. 性格心理学研究, **9**, 56-57.
- 齋藤勇 (1985). 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ. 心理学研究, **56**, 222-228.
- Saxe, L. (1991). Lying: Thoughts of an applied social psychologist. *American Psychologist*, **46**, 409-415.
- Shapiro, D. L. (1991). The effects of explanation on negative reactions to deceit. *Administrative Science Quarterly*, **36**, 614-630.

(2008年3月4日受理)